

2011年度

# 新潟大学国際センター 年報

Annual Report  
of Niigata University  
International Exchange Support Center  
2011



## 宮田 春夫

### 研究テーマ：環境と開発に関する南北関係

多様な主体が多様な役割を果たす複合的相互依存の国際社会において、環境と開発のための南北関係はどうあるべきか、全地球的レベルから地域共同体レベルまで、また、多国籍間協力、二国間協力を包括的に捉えて、政策のあり方を探っていきたいと考えています。

また、教育においては、理論と現実の両方を見ることにより、理論を現実に即して理解すること、また、対応を理論に基づきつつ現実に即したものとすることができる学生を育てたいと考えています。

所属学会：国際開発学会、環境科学会、International Studies Association、日本平和学会

### 1. 授業等

2010年度と同じく、「教養教育に関する科目」及び課題別副専攻「平和学」の授業のほか、農学部及び現代社会文化研究科の授業も担当しました。

学部レベルで英語で開講している教養教育に関する科目は、短期交換留学プログラム科目としても重複指定されています。そのほかにも、課題別副専攻「平和学」に指定されている科目があります。

課題別副専攻「平和学」として単独開講している科目の一部は、開発途上国の問題に強い関心を持つ学部生・大学院生のために始めた勉強会を正式な授業としたものです。

#### 本学における担当授業一覧

開講期	授業科目名	備考
春	Applied Research of International Relations: North-South Relations for the Environment and Development	教養教育に関する科目。短期交換留学生用科目としても指定。 環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。大学院用の内容を、学部生向けの評価方法にして開講。
	Environmental Policy Study: History of Environmental Problems and Development of Policies in Japan	教養教育に関する科目。短期交換留学生用開講科目としても指定。 明治から現在に至る日本の環境問題の歴史と政策の展開を見ながら、どのような環境問題の変化、社会の変化、国際関係により環境政策が変わって来たのかを論じる。
	国際開発協力演習（環境と開発）	課題別副専攻「平和学」科目。 開発援助と環境の事例について、政府、非政府の援助関係者から直接話を聞く機会をも取り入れて、意図通りまたは真にそれを必要としている人に届く援助の難しさという現実を直視した上で、積極的に評価できる面を評価し、そうでない面についてはどのようにしたら改善できるのかを学生が考える機会を提供。

	国際開発協力論：「開発」概念 I	<p>課題別副専攻「平和学」科目。</p> <p>OECD 開発局の職員たちが書いた「開発」についての考え方の変遷を紹介した本（英語）を使い、どのようにして「開発」についての認識が深まっていったか、どのような背景の下に各々の開発理論が論じられたか、それぞれの開発理論がどのように開発援助等に影響したか等を論じる。</p>
秋	国際開発協力論：「開発」概念 II	<p>課題別副専攻「平和学」科目。</p> <p>「改革派」とされる考え方の流れを汲む Amartya Sen が『Development as Freedom』（英語原著）で整理した「開発」の幅広い概念を学ぶ。</p>
	North-South Relations for the Environment and Development	<p>現代社会文化研究科。</p> <p>環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。</p>
	人類共同体のための国際環境政策学	<p>教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」科目としても指定。</p> <p>どうして環境に関する国際協力を行うかに重点を置いて、背景の国際秩序の課題、「持続可能な開発」の本来の意味、「地球環境問題」と捉える無意識の課題認識、「持続可能な開発」の状況を示すエコロジカルフットプリント、国際協力の歴史等の基礎について論じた上で、多国間協力、条約、ODA 等の個別課題について論考。</p>
	平和を考える in 新潟	<p>教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」科目としても指定。</p> <p>複数の教員や外部講師の講義による授業の 1 コマを担当し、「開発途上「国民国家」の外と中の秩序」と題して、「民族」や「宗教」によるものと思われている紛争の問題について論考。</p>
	平和学総合演習	<p>課題別副専攻「平和学」科目。他の副専攻「平和学」委員と共同で担当。</p> <p>副専攻修了認定予定学生 1 名に対する論文指導等を実施。日本ではあまり知られていない安全保障共同体論により論文を構築できる見通しであったが、その学生は、学期末近くなってから、修了認定を断念する結果となった。</p>
	平和学修了ペーパー	
	自然環境関連法規	<p>農学部専門科目。複数教員分担のうち主に条約に関する 2 コマ及び学生の課題発表でのコメント等。</p>

集中講義	開発途上国の環境と開発：事例研究	<p>教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」指定科目。</p> <p>一種の集中講義として、9月の2週間のマダガスカル現地調査を中心に開講の予定であったが、2011年度も同国訪問は断念。しかし、2008年に正常でない政権交代が行われ、その後諸政治グループの合意による選挙が実施されないこと等により、経済制裁等が続き、2011年度には、これまで協力下さっていた駐日大使館の大幅縮小、プロジェクト訪問等を受け入れて下さっていた現地 NGO の解散等の事態に至った。そのため、マダガスカル訪問について、根本的な再検討が必要になっている。</p> <p>他方で、2011年に入ってから学生たちによる「新潟大学ビデオレター交流プロジェクトグループ」が、新潟市立内野中学校の生徒とカンボジア・バコン村の孤児院付帯の英語教室の生徒の間のビデオレターの交換を行ったことを契機に、この授業として、カンボジアに加え、ラオス、ベトナムを訪問し、NGOによる農村の環境保全と現金収入策を組み合わせた活動等を見せて頂いた。その概要については、本文に別途記載。</p>
------	------------------	---

以上のほかに、正式な開講教員として登録されていませんが、課題別副専攻「平和学」科目である「平和学入門」（春学期）のうち4コマ（「南北問題・人間開発」及び「環境問題」）は、私の専門に関わる内容であるため、担当教員と共同で講義しました。

## 2. 課題別副専攻「平和学」

2008年12月から課題別副専攻「平和学」委員会に参加し、2009年4月から同委員会の代表を務めています（副専攻自体は大学の教育課程に位置づけられた明確な制度ですが、各副専攻の委員はボランティアです。）。この立場から、課題別副専攻「平和学」の修了ペーパー（1名）の指導、審査、非常勤講師との連絡・調整、副専攻の運営の調整、管理等を行いました。また、6月に新潟国際情報大学を会場に日本平和学会が開催された機会に、多様なアクターが多様な役割を果たしている複合的相互依存の下で重要で、グローバリゼーションの中で更に重要になっている NGO から見る国際関係の講師を発掘し、2012年度からの開講（集中講義）を実現しました。

## 3. 教養教育に関する科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」としてのカンボジア等訪問

この科目は、教養科目の具体的目標のうち次の3点に寄与することを上位の目標としています。

- (1) 専門科目の学習により得られた専門的な知識を、より広い視野や知見の下で位置づけ、意味づける力を育成すること（「百聞プラス一見の力」をつける。）
- (2) 大学院教育（または社会人）に接続する学部教育の中で、自ら学ぶ学習能力を育成すること
- (3) 自らの心身の健康を管理し、感性と精神を高め、社会や世界に役立つことのできる経験や意欲（同情ではなくコミットメントによる協力）を育成すること（グローバル化した現実社会で積極的に行動できる力をつける。）

そのような上位目標に寄与すべく、この科目は、1990年頃から私立大学で盛んに行われるようになった海外体験学習の手法である現地訪問により、開発途上国の環境と開発の問題または環境問題もしくは開発問題について、一般的な理論に上乗せして具体論を論じることができるようになる（「百聞プラス一見」の力をつける）ことを直接の達成目標として実施しています。2005、2006年度にマダガスカルの政府機関（大統領府国家開発計画事務局、環境省、自然保護区管理協会等）、JICA事務所、青年海外協力隊員またはJICA技術協力プロジェクト、現地NGO事務所、そのNGOによる残存自然林保護と隣接農家の収入向上のためのプロジェクト、自然の保全と入園料収入による地域コミュニティのための小規模開発の組み合わせの成功により愛知万博の際に表彰もされた国立公園の事例等の訪問、現地の大学生との意見交換会等を行いました。しかしながら、学内の資金確保、理解の広がり不足等のためにその後実現せず、更に、2008年に正常でない政権交代が行われ、その後諸政治グループの合意による選挙が実施されないこと等により、経済制裁等が続き、2011年度には、これまで協力下さっていた駐日大使館の大幅縮小、プロジェクト訪問等を受け入れて下さっていた現地NGOの解散等の事態に至りました。そのため、マダガスカル訪問については、根本的な再検討が必要になっています。

そのような時、2010年度後期に、学生たちによる「新潟大学ビデオレター交流プロジェクトグループ」が、新潟市立内野中学校の生徒とカンボジア・バコン村の孤児院付帯の英語教室の生徒の間のビデオレターの交換を行うことを企画し、実施した機会に、カンボジアの抱える諸課題、関係機関・団体の状況、訪問の場合のリスクとその対策等について理解できたので、2011年度にこの授業として訪問することとしました。しかし、カンボジア市民フォーラム事務局長及び最も早くからカンボジアに事務所を構えて住民支援を行ってきた日本国際ボランティアセンター及び上智大学アジア人材養成研究センターから多大な協力を頂いたものの、カンボジアへのスタディーツアーがあまりに多く、JICAを含め、多くの団体・機関は、対応能力を超える訪問者には対応できないという状況でした。そのため、カンボジア内でJICAカンボジア事務所、日本国際ボランティアセンターのカンボジア事務所、同センターの農村の収入向上策と環境教育のプロジェクト、上智大学アジア人材養成研究センター、バコン村の孤児院とその付帯の英語教室等を訪問させて頂いた後は、ラオスで日本国際ボランティアセンターの農家の収入向上策のプロジェクトを訪問させて頂き、更に、そこから国境を越えたベトナムで、旧南北国境を見てインドシナを理解を深めることとしました。

現地訪問期間は、9月4日（日）から18日（日）までの15日間、履修者は、教育学部4年1名、法学部2名（4年と2年）、経済学部4年1名、農学部4年1名と、多様で、かつ、大学生として成熟しかつ、この授業の内容を積極的に学ぼうとする学生が集まりました。訪問先での質問も多く、また、最終的に提出されたペーパーも意欲的なものでした。

事前勉強会、事後の整理、ペーパー提出とともに、参加できなかった学生たちとの経験の共有のための報告会も行いました。

日程と訪問先の概略は次の表の通りです。

なお、大きな手間がかかるものの、訪問先や見学内容等をより学習効果の高いものにし、また、できるだけ現地の人々の日常生活に触れられるよう、日程の調整、航空便やバス、運転手付きの車を含む移動手段、宿泊施設等の手配は、全て教員が行い、プロジェクト地訪問と空港往復の運転手付きの車以外は、公共交通機関を使用しました。

交通費、宿泊料、食費、入園料等一切で、学生の個人負担は20万円弱でした。大学からの助成等はありません。



訪問先

訪問先

- ①プノンペン：JICA カンボジア事務所、日本国際ボランティアセンター（JVC）カンボジア事務所、旧刑務所等
- ②JVC：生態系に配慮した家族経営農家の生計改善（CLEAN）プロジェクト・環境教育プロジェクト
- ③シエムリアップ及びアンコール遺跡群：上智大学アジア人材養成研究センター、Little Angeles 孤児院等
- ④JVC「森林保全と持続的な農業の推進」プロジェクト
- ⑤フエ：王宮（世界遺産）等
- ⑥旧南北ベトナム国境

日程表

4日（日）	成田ーバンコク乗換ープノンペン
5日（月）	国立博物館、王宮、旧刑務所他の内戦関連施設、市場等
6日（火）	JVC（日本国際ボランティアセンター）「農業・農村開発に関する資料・情報センター」、JICA 事務所業務説明会
7日（水）	プノンペンー定期バスーシエリムアップ
8日（木）	JVC：生態系に配慮した家族経営農家の生計改善（CLEAN）プロジェクト・環境教育プロジェクト
9日（金）	上智大学アジア人材養成研究センター、アンコールワット、バコン村 Little Angeles 孤児院
10日（土）	遺跡見学
11日（日）	シエムリアップー国境でバス乗り継ぎーバンコク バンコクから夜行急行列車寝台ー
12日（月）	ーウボンラチャタニーー定期バスームクダハンー定期バスでメコン川第2橋を渡る ーサワナケート
13日（火）	JVC 事務所ーピンー「森林保全と持続的な農業の推進」プロジェクト
14日（水）	ピンー定期バスーフエ
15日（木）	市場、王宮（世界遺産）等
16日（金）	戦争で破壊された建物（教会、高校）、Quang Tri の城塞都市跡、Vinh Moc の地下トンネル、旧南北ベトナム国境（Ben Hai 川）
17日（土）	フエーハノイーバンコクー夜行便
18日（日）	ー成田

写真



プノンペンの宿の近くの地元の人々にぎわうそば屋で朝食



高校を改造して政治犯の収容所とした施設



収容所内の拷問の行われた部屋



懸垂器具に逆さ吊りにして拷問を行った場所



教室を細かく区分して作られた独房



慶応大学のグループと合同となった JICA 事務所での事業説明会



日本国際ボランティアセンター (JVC) カンボジア事務所



タイ等と同じく、カンボジアも大雨が続き、水田は一面に冠水



JVC 環境教育プロジェクト



JVC 生態系に配慮した家族経営農家の生計改善 (CLEAN) プロジェクト：農家の話を伺う。



上智大学アジア人材養成研究センター



アンコールワット遺跡正面通路の修復実施についての上智大学の看板。大きな技術解説の写真の右には、修復に関わった人多数の写真が印刷されているが、全てカンボジア人で、日本人が関わったことは書かれていない。ここに、現地の人中心の同大学の姿勢がよく現れている。



バコン村の Little Angeles 孤児院付帯の英語教室で、新潟市立内野中学校の生徒たちからのメッセージを伝える。



Little Angeles 孤児院の子供が作った革製の影絵を購入すると、それぞれを制作した子供と記念写真を撮らせてくれる。



私設の地雷博物館右の小屋には掘り出した地雷が詰まっている。



遺跡を訪問すると、すぐに土産物売りの子供がやってくる。



カンボジア・タイ国境



タイ国鉄夜行列車の最後尾2両は、かつての日本のブルートレインで、しかも新潟鉄工所製であった。



ラオスでは、森林から採集したものが生活上、重要な位置を占めているので、森林の減少や政府による権利の処分が住民の生活に重大な影響を及ぼす。例として、昆虫の唐揚げ、タケノコ等を食べる。



JVC ラオス事務所での事業説明。



「森林保全と持続的な農業の推進」プロジェクト：政府若しくは公務員の偏見により脅かされている焼き畑



井戸の修復と維持管理体制作りの協力



「森林保全と持続的な農業の推進」プロジェクト実施地の村長宅訪問



ラオスからカンボジアへ国境を越えて走る路線バスの中



フェエの王宮



旧南北ベトナム国境近く：クワンチ近くでの戦闘で破壊された教会



戦闘で破壊されたクワンチの城塞都市跡





沖にある戦略拠点の島への物資補給のために村人が掘って生活したトンネルの中の、出産もあったとの展示



旧南北ベトナム国境

#### 4. 研究活動

##### (1) 学会活動

国際開発学会（6月、12月）、International Studies Association（2012年3－4月）等に参加して座長を務める等、議論するとともに、国際開発学会の会計委員会の業務の一部に関わりました。2011年11月からは国際開発学会理事も務めています。

##### (2) フィールド・スタディーに関する研究会

「百聞プラス一見」の力を学生につけさせるべく、授業で知識を得ることに加えて、効果的かつ安全に開発途上国の現場を見る機会を重視しているため、引き続き、「大学教育における海外体験学習研究会」への参加等を重視していますが、2011年度の研究会（福岡）には参加できませんでした。安全対策等、実施に関わる課題の研究や情報の維持にも努めています。

#### 5. 著作

10月、教養教育に関する科目「人類共同体のための国際環境政策学」の授業資料を基に、『人類共同体のための国際環境政策』（355頁）をブイツーソリューションから出版しました。

#### 6. 開発途上国との協力、開発途上国の実情等を知り、同じ人類社会の未来を共有していることを理解するための特別講義等

開発途上国との協力、開発途上国の実情等を知り、同じ人類社会の未来を共有していることを理解するため、実際に協力に従事している方等から講演等して頂いて具体的な知識を得る会を、一部については課題別副専攻「平和学」の開講科目「国際開発協力演習（環境と開発）」と関連付けつつも、その科目の履修生以外にも開放し、また、特に意義があるものについては学外にも開放して企画・開催しています。多くの場合、テーマは、開発途上国との協力に関心を持っている学生たちの希望を考慮して選定しています。

2011年度には、上記「開発途上国の環境と開発：事例研究」の事前勉強会を兼ねて、カンボジア市民フォーラム事務局長の山本裕史さん（東京大学研究員、桜美林大学講師等）に、カンボジアの開発課題、カンボジアで活動する開発協力NGOの抱える課題等について話して頂きました。

にいがた青年海外協力隊を育てる会の「出前講座」として、青年海外協力隊員の話をお聞きする企画も立てましたが、御本人の都合がつかず、実現しませんでした。

そのほか、ODA 関連機関・企業、国際機関等、開発途上国関連の職に就きたいとする学生か

らの相談がしばしば寄せられ、進学先、就職のための諸条件等について助言しています。

## 7. 多大学間交換留学

アジア・太平洋多大学間交流 (University Mobility in Asia and the Pacific: UMAP) 担当者としてそのオンライン学生交流システム (UMAP Student Connection Online: USCO) の仕組みを研究した結果、本学でも 2010 年度受け入れ分から受け入れることになりました。2011 年度に初めてその交換学生受け入れが実現し、春にタイの、英語で授業を行っている公設メ・ファー・ルアン大学の経済学部の 4 年生 2 名を 1 学期間受け入れ、秋には、メキシコの University of Guadalajara 大学の 4 年生を 1 学期間受け入れました。

2012 年から 3 年間、夏季プログラム等に参加する学生に対し 1 人 800 ドルの奨学金を 1 実施大学につき 10 人分まで、全体で 100 人分を UMAP が供与することになった機会に、本学でも夏季プログラムとして、私の開講する「Environmental Problems and Development of Policies in Japan」と阿波村教授、張准教授他によるオムニバスの「Japanese Experiences from Various Perspectives」の 2 科目（それぞれ 2 単位）で構成し、それぞれの科目の履修価値を高めるエクスカージョンを付帯させる形で「Summer Course at Niigata University: Lessons from Contemporary Japan」を実施することとしました。

## 8. その他

次のところにウェブサイトを設け、授業についての詳細情報の提供等を行っています。

<http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~miyatah/>